

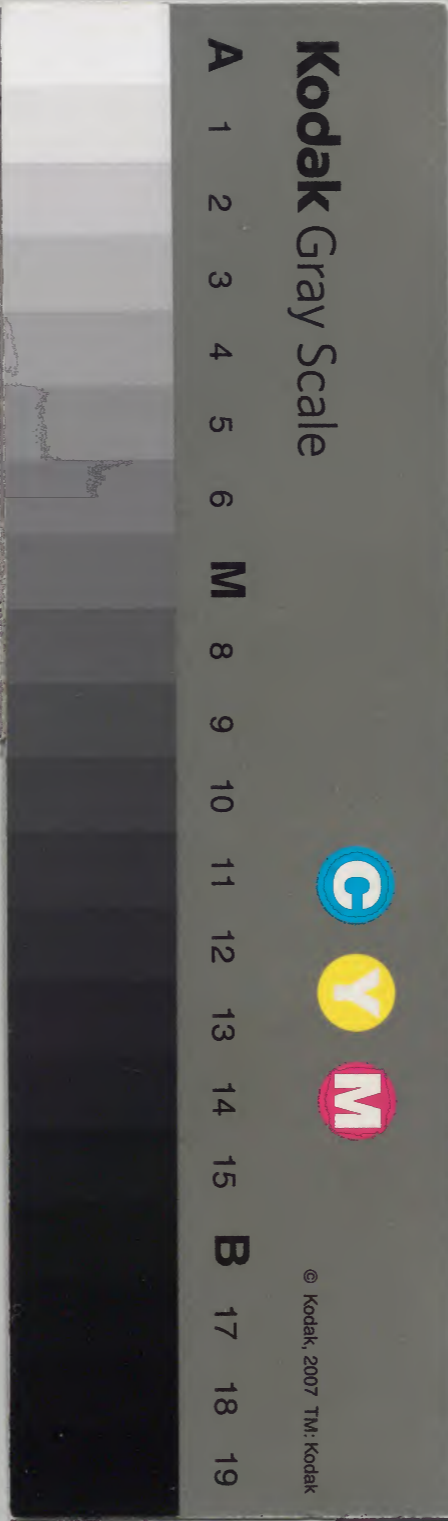
奥羽観迹聞老志

共

				和書門類
		二九一五五		
	一	二〇	函	
	二	架		
	四	册		

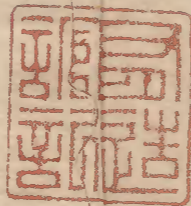
庫	文	閣	内	
二七四		二九一五五		和書類
函	一	四		
二	架			
一	册			

内閣文庫	
番號	和 29155
冊數	14 (5)
函號	174 264



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

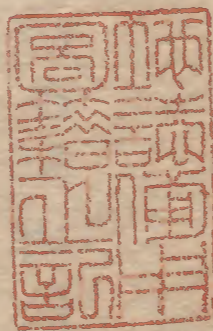
宮城



奥羽觀 述聞 老志卷之六



内一〇九二八號



白石先生曰宮城乃神所都之墟而古史所謂高天原地与州壤相接矣古者其土壤最廣後分為常陸陸奥二州凡東方古書冥通

四十八代称德帝天平神護二年十二月乙未以陸奥國磐城宮城二郡稻穀一萬六千四百餘斛賑給貧民

按此舉可視善政之化也

宮城

八十三代土御門帝正治二年八月廿一日羽林賴
家令宮城四郎伐芝田以郎九月十四日城陷十月
十三日歸于鎌倉

神名牌曰宮城郡四座大二座

伊豆佐賣神社志波彦神社大名神

鼻節神社多賀神社大名神

風土記曰宮城郡

名浦五 湊五 岩山三十 岡七

河五 川四 温湯三 宮社一十

寺院九 墳墓三

宮城郡東限松嶋都島西限香葉川南限松岡湊北

限寒河山

貢杉樟檜檉黃檉茯苓松狐狸狼猿兔鱗鮭鯿鮒鮎

等亦出怪石奇菜出桑麻白綿紙墨等共風土記

按松岡寒河山今不詳其地香葉川蓋指廣瀨

川乎河流經府城青葉山下來故稱之乎

仙臺城

此城前太子黃門政宗卿依神君命以慶長

七年壬寅相攸于此自玉造郡岩手城遷來築斯

城鑿斯地搆大厦設高樓曰山而為居第焉東奧

高嶽甲於一國矣西北之所圍乃和泉峻嶺也西南之所蟠乃不忘大峯也七疑峯連其北太白嶺聳其南東北橫榴岡東南臥茂崎山廣湍河流遠地下宮城原野帶郊外第宅爰設市升爰區魚塩之利商賈之便尤得其所焉可謂龍蟠虎踞相備之地也往昔有太白山人者遊息于斯地隱見于人間幸遺其仙蹤焉故号曰仙臺

或曰此城用明帝朝完所築中古島津陸奥守者始居茂嶺城今其城址存後廷此城文治中結城七郎朝光居此爾後荒廢已久永祿中國分能

登守未居天正中嗣子彦九郎盛重繼而居先是黃門君在北日館慶長五年十二月二十四日依命移于此明年起土木事七年壬寅落成下居焉又曰少林古城寬永三年丙寅與之五年而成又曰外城羽林君十五年戊寅經營之十六年己卯落成

龜岡神社

在青葉山西北太守遠祖宗村君建久元年庚戌遷鶴岡八幡於伊達郡高古城外号龜岡亦來慶長七年壬寅黃門君遷于仙臺城東今其址

天和元年辛酉 網村朝臣依 嗣子扇千代君
誕生而復移于城後青葉山北倫神宮立巫祝以
新社稷平安古來以孟夏朔祀之

青葉山

於歌書
作音明

治府城頭南嶺春來吐綠先 群山最早矣 号青葉
山於和歌亦稱之 但考萬葉集等則其文字作青
羽且歌句多詠冬樹之狀 或比諸綠頭鴨 今舉
說且風土記有青葉川名蓋古有此山稱青葉來
而川亦指其山下河流乎 勅撰名所抄云八雲御
抄並範魚抄若狹云云清輔抄陸奥云云宗祇國

分入之近江

三原王歌一首

夫木集秋
露作白露

萬葉八

秋露者移示有涼里水鳥乃青羽乃山能色能見
者

秋の露

千載秋

昔乃傳之楚兒也

常志の事と秋の字 秋は色也 楚之孫也 秋は色也 楚之孫也

影古の事

或は古の事

多し... 此... 山...
少し... 山...

按大嘗會者王者之大祭悠紀主基者左右之
重礼預此國を可慎之至於封内始見于此延
喜式第七曰踐祚其年預令所司上定悠紀主
基國郡奏可訖即下知依例准擬又定檢校行
事凡散齋一月致齋三日齋月者預告諸司及
下符畿内不得預佛齋清食忌其言語凡造大
嘗宮者前祭七日神祇宮中中臣忌部二官入
依次立率悠紀國司及雜色人等為一列亦中

臣忌部相別率主基國司以下准上皆單行各
自朝堂院東西掖門入至宮地龍庭道命列左
右悠紀在東主基在西鎮祭其地別國所倫幣物其說如
此當此事者預其祭地豈非幸耶

續古今夏

右上方

多し... 山... 海... 山...
續古今夏

水多の... 山乃... 必... 山...
風... 山...

落くふまのふの如くけりては
歌よ

物持平之友 物持之位為子

多由のまのふの如くけりては

新撰古有 古有の如く

新撰古有 古有の如く

物持平之友 物持之位為子

通具脚

夫亦万々

あつたふまのふの如くけりては

此歌及仲實之作皆以青葉字而詠之

光室院乃遠二品秋多末五十等

日 秋也

秋也

位良者

水多此

建保四年

日 光室院

永久

永久

仲實別長

經峯靈廟
經峯靈廟

在城東廣瀨西南相傳有人往昔藏經于峯頭仍
稱之如今安國君三代陵墓于此曰寺正宗山瑞
鳳寺黃門君廟號曰瑞鳳殿負山公前羽林
君號大慈院義山公後羽林君號見性院雄山
公殉死墳塋亦相從並皆所以致慎終追遠之孝
哀示忠臣義士之赤心也其宮殿廊廡也盡富庶
其寺院樓門也極輪奐其地也河流過于寺下鬱

林遶于門前古杉老松暗幽迳層巒衆峰凝遠所
開窓則萬里之滄溟涵于坐上臨砌則千疊之江
山落于欄外可謂佳境壯觀之地也有佗邦客一
日登精舍題一絕實能名壯其景其詩曰

登端鳳蘭若即事

無名氏

瑞鳳舞城巒

大寄八幡神社

在城外河北山頭慶長年中黃門君近之自玉
造郡岩手城今富塚內藏允信綱木幡木工从旨

清真山式部繼重等經營之同七年八月十一日
落成社東建寺曰惠澤山龍宝寺寺中藏龍珠仍
為其寺号焉此宮社也綉闥彫甍極富麗結構之
盛山節藻抗尽丹青光彩之美其所莊嚴者天下
之妙工甚五郎者彫刻而妙術在左手時人稱五
手甚五郎是以今所存之人物禽獸花草蔬果之
象自然有生意飛動之勢如今爰存焉非後世之
庸工冗手所及矣一國之奇觀也尔後寬文中
後大守綱村若下命以致脩造加莊飾也此時建
石華表令儒臣内藤開齋作銘虎岩道說書之其

銘曰

奥州宮城郡當社八幡神者州人之所崇也慶
長年中本州牧君政宗卿相攸於此地改造
其祠廟方今其昆孫龜千代君取瑕石於州
内東山為華表次創立焉欲永年不朽也銘曰
嗟國之為國以有神嗟神之為神以有國惟神以
敬惟國以寧永興華表萬年無極

入寬文八年戊申八月十五日開存叟希顏敬書

滿勝寺

号當牛山始在城府東北今移之城北 大守遠

慶安三年庚寅吾太守忠宗君請建
東照神宮廟社于治府大樹許之迺欲擇地于
北良隅而起土木事焉兼應三年甲午廟宇落成
焉殿堂門廡悉極莊麗置一字奉祀事号仙岳院
令石川大和請寺主於江都東叡山仍最教院僧
正晃海共俱奉神輿而至于東奥太守清道而
郊迎之三月十六日夜遷宮有司監造於是乎各
有賞十七日舞猿樂於宮庭自是間歲有祭礼以
九月十七日為祭且其次弟也令騎士整威儀正
行列而前馳後拒于神輿矣且市童徒小兒輩逞

色莊設異體携花者巧剪絲荷果者誇彷彿喧鼓
吹張行裝而過斯日也通國群集滿城奔走草食
壺漿者不可勝數焉一時之奇觀也尔後世建公
廟而祀之宮殿
聖玉大悲閣

在治府以南石那坂相傳田村麻呂東征之間以
宮城產聖玉者為側室平日愛護大悲像後人
建閣而藏之

多門堂

在城東市店中有寺曰金光山萬福寺名取北目

館主栗野大膳大夫常護持之像也天正四年藤原宗國者安置于此

真福寺

曰孝沃山在城南河畔光嚴帝建武元年遊行五世僧安國者東行所開之地也

廣湍川

濫觴出于當郡大倉村巨舟山岳麓而至同郡熊附村与名取郡新川邑溪添合經愛子村合名取川于囊原村同流入于海城下管回處俗曰仙臺河其下流曰長驛河是廣湍川也多鮎魚鮭魚

矣或曰刈田宮驛口亦曰之廣湍川其說見于下東史曰文治五年己酉奈衝攝于刈田郡得水流于名取于廣湍為要害之地以若九郎大夫余平六等守栗原三迫名口一野邊令河田太郎行典秋田三郎致文守出羽自將兵拒幕下抗國分原鞭楯

少林古城

在小泉村黃門君寬永中經始此地經五歲而成蓋擬之菟裘地乎今猶存焉

釋世堂

在榴岡菅廬以東元祿八年乙亥綱村君始開
此地建堂以置孺人淨眼院所護持親迎像且
其南大設騎射地習磬控忌縱送忌植之以單重
絲綸櫻各數百根及青松紅楓千餘株未聞佗方
並樹鬪花如此夫多矣好事風流之設也是乃所
以孺人追考之示遺愛也迺古之所謂鞞植城
址是也自岡上望則木下之古林傲于春色宮城
之曠野富于秋爽其木末則本荒鄉也錦荻績織
于芳原其極目則松浦寫也布帆ノ一于瀛海千
家之綢繆多賀之縹緲皆入吟眸玉田橫野亘于

躑躅ト北野和泉東奧峻于西岳實郊外之絕境也

古書云作山榴今從風土記或作榴岡
在南目村有高山謂山榴岡東史稱岡今鞞植
古墨蓋此地鄉人不詳旧址
風土記曰躑躅岡在府之西府乃多賀古府也出紅躑
躅官以之搨衣号都茲搨
按往古岡上多躑躅且以其花而搨衣帛者可
視雅物之一故事也其制不傳惜今不能見之
矧又躑躅花亦絕而亡

歌云... 菅原又古和
六帳夫... 藤原... 古今人...

〜〜〜

〜〜〜

一印好... 菅原...

一平... 菅原...

永久四年百...

夫... 菅原...

二... 菅原...

〜〜〜

〜〜〜

菅神廟

号照里閣

在同所西岡祀菅道真公往時在宇田郡八幡崎

相傳六十四代圓融帝天延二年甲戌年持村者

所勸請也後八十九代龜山帝文永元年甲子

移之宮城郡國分在小俵村玉崎山中玉崎或作

古玉田也又百六代後奈良帝天文十三年癸卯

白石參河守宗明者再真之尔後百八代後陽成

帝慶長十六年辛亥我黃門君新致脩造焉百

十代本院寬永十七年庚辰忠宗君以四十二

元歲復新建立百十一代後光明帝慶安三年庚

菅神廟

寅偶會

東照宮經營之事仍移其東林至寬文七年丁未
七月少將綱宗居近之榴岡而新造

南目古館

在南目村一則喜多目紀伊居館一則相傳結城
七郎朝光居城也

猫潭疊石巖

在鄉六道路鳥崎下有深潭奇石出河畔可半町
新岩一文餘曠狹小大截然相並壁立數尋其石
上高平而可坐可卧可飲可釣其上流石瀨潺湲

可涉可濯其下口碧潭蘸藍其南崖樹林落影秋
來流紅芍可愛之佳境也相傳有妖猫匿石中而
往々出為怪焉故謂之猫潭

樂壽園

在城北鄉鹿村斯地也江流遠其左新岸峙其前
山岳環其右平田擁其後其上宜梅樹仍古來農
家植之頗多到春時則無處而不清香幽芳也里
人呼曰梅邑或稱梅鄉負享四年丁卯八月十三
日綱村君始知佳區地移民居四家而為園圍
之所余上野市即兵衛河東田三右衛門司之起

土木事。艾草去荊，遠短垣于四邊，松于其內，柴于
其外，中有一丘，丘上有桂樹，名曰桂丘，營亭於其
南園中，梅樹凡百八十餘株，俱古木老樹，其根也
屈蟠其幹也，曲節橫斜，交枝偃蹇，並陰風致自然，
所以不假機巧作為之手，而見天工之妙也。趙師
雄之意可述乎？此劉後村之情可新乎？此是乃曰
大守之佳玩，而顯勝地于此時焉。至明年戊辰
春三月，稍成其事，另曰樂壽園，蓋取諸仁知之於
山水者乎？是月望日，饗宗族家門會，群臣有司始
開宴，而賀其落成焉。且俾儒雅之士文藻之，輩和

歌之徒，秋門之屬，呈唐詩和歌，以暢其佳趣，以著
其祝志，可謂推己與人同其樂之君子也。自是花
時，每在東藩，逍遙遊觀，以此為例焉。可謂幽致風
流之設也。斯時也，行人憧憧，往來絡繹，門有繁
鞞，馬墻有立，肩輿花吐，穠艷香凝，幽芳花因地而新
地，因花而貴，是亦可謂繁華之都，壯觀之衢也。開
花之盛，具言之則點，疎者如星，疊者如密，者如雲
，顯者如玉，層者如雪，鮮明者皎，其色
也，馥郁者芬，其臭也，滿面之香風透袂，遮眼之
穠艷起吟，如入于妙香國，似坐于椒蘭室，務觀千

億之化身言可分澤民三百之苦吟言可費豈羅
浮庾嶺之奇孤山陔頭之勝而已哉伯顏之擔頭
猶堪揜林連之夢魂却愛鏖坡公所謂羅浮山下
梅花村者同日之譚也於是乎貴太守風致之
高標識趣之秀逸也

神鏃石

在白石館腰地俗說曰山神相戰所射之鏃也故
曰神鏃其形質似箭鏃或赤或黑或白或碧雷雨
之後必得之石中本草所謂霹靂石者是也或說
兵書謂之骨兩此地之外如美郡亦有之

三代實錄光孝元慶八年九月丙戌出羽國寺言
六月二十六日秋田城雷雨晦冥兩石鏃二十三
枚七月二日飽波郡海濱兩石似鏃其鋒皆向南
是亦霹靂石也

磐神山

在名取宮城境間尤高山也山頂建小祠是亦安
盤以即盤二郎像古之獵師而神怪之人也
神山登之已十八町山下有寺号瑞鹿山祥岩寺
後綱村君改之曰栢華山大梅寺

諏訪神祠

諏訪

在愛子村不詳所建有上棟文記曰百三代後花園帝康正三年丁丑是歲改元長祿國分能登守藤原宗政所建而有元龜二年永祿三年之事

多門閣

近神祠有寺号知福山大門寺有上棟文曰元龜二年官鶴者建之

弥勒堂

同村相傳運慶所造有造有寺号正覺山弥勒寺傍有石墳高五尺餘題曰元享四年甲子是歲改元正中二月二十五日遺弟圓然為先師立石

鳳鳴瀑布

在作並村山中在處大小凡四十有八修共界破青山鑿落丹崖不知噴雲濺月幾春秋也相傳往古有羽客來遊吹笙而臨于此後人呼曰鳳鳴瀑布

牢獄洞

在熊卧村河畔有空洞其狀方一間鄉俗曰牢獄屋料巖

在大倉村其狀似刈田小原村石岩自山頭至河畔如立屋柱長五六間廣八九寸是亦神造之奇

石也

弥陀堂

同村隔河流有寺号極樂山而法寺相傳平重盛

家巨筑後守負吉所持之像也藏茶臼茶竈等

山鬼橋

在同所入山中一里餘新岩高壁疊雲竈烟峰巒

絕處路滑甚遠架一石橋而下臨萬丈幽壑巧橫

神造殆非凡境焉視者邊胸度者斯魂鄉人曰天

狗橋以示非其人為也

屏風嶽

在福尚村建權現祠尤峻峻山勢如屏風壁立萬

仞有寺号鷲倉山松林寺相傳推古天皇養老二

年經營之未詳其山

幽泉洞

有嶺白石村有寺号狐白山宝積寺是亦古跡也

和泉嶽

同村山岳跨府城西北峻極与川田高岳相低昂

焉山勢甲國府群山圍繞此山下俗人呼曰嶺白

石嶽

山内館

山在實沢村。山内須藤刑部少輔者永祿中在此城。
鄉人誤山内而称山野村殿。同所有古城八乙女。
淡路者居之。有古蹟。此山。人。傳。云。
長命山城。在山上谷川村。鄉人曰長命山。東史所謂國府中。
山物見岡者是也。
東史曰文治五年己酉八月十四日。泰衡在國府。
中山物見岡。今小山。朝政宗政朝光下河邊行平。
圍之。泰衡先亡擊。殘黨而獲四十餘級。首筑前坊。
良心者有戰功。館北曰伊谷沢村。賴朝鄉陣所也。

洞雲寺

在七北田東北根村。号龍門山。鄉人称山寺。百一。
代後小松帝應永七年庚辰。秋祥山所開也。往時。
有僧房二十四。字其後荒廢。今所在。滝月泉滝江。
北當陽。瑄濱龍雲景雲積苔。回軒江西終。餘九區。
其地也。峯回路轉。幽邃寂寞。密林聳。寺門細。迂入。
空院。古杉喬松。密栝。深。惟聞鳥聲。山靜。溪音響。
長。吳有殘僧說。旧時。而。是以發。深省之地也。
其所珍藏。一曰舍利。二曰觀音。三曰藕絲。袈裟。相。
傳。應永帝所賜也。四曰香合。五曰菩提樹。數珠。六。

曰鈴七曰唐画八曰蛭开九曰靈石

宮城野

南目村在曠野謂之宮城野而天下古今所稱者是也自木下鬱林以北至原市馭自山榴岡上以東至興館村平原渺々草野芊芊原上錦萩古今專其名女即花我裳香萩葉藤袴刈萱桔梗及無名野草無數秋花以百數焉又雲雀蕞鷄殊多或巢或育太子之於羽獵也欲獲之多焉故平日禁雉兔芻蕘者而不得妄往矣鄉人呼曰活巢原東則海水濘々有千家塩釜松浦島末松山浮島

壺碑興弁等之名區而襟帶于其中南則有茂山千貫松笠嶋武隈等之旧跡而當回于其際西則寺院森々其木末則不忘山東與岳白石大岳羅列峭立北則七疑峯巖多賀古城利符村落尽入吟時東史所謂國分原是也此地古稱國分莊也且夫國分寺号亦皆所以出于此莊内也

坂河院の時を尋る事多し時々一
の心とよみ傳へし

千載夏

夏は千載の心とよみ傳へし

按信夫文字摺本謂所出于信夫郡之衣也然
詠于此者花草名此草生于原上至初秋而始
著花綠莖濃紫其結花也蒙紆其莖而加紆繩
以草書之變態相似春蛇秋朝之象而譬諸信
夫文字摺衣以借其義而名此花草也又鄉俗
呼之別稱花紫焉實一物也宮千代墓址頗多
右實前左故右左の家あり夏月ぬれといふ
ん成りて

曰

藤原敦仲

小も多ももりも花さく思ふやきぬ

志くやふもむの月りしきく

曰秋上

藤原基俊

えんやき野の萩や少庵乃ほま

花さくしきもむりしき

按往時麋鹿伏原上者可視此花多咏鹿鳴者
也是知古者深林幽邃而禽獸亦得其妙者乎
阿河院の時時るそふりしき

曰

藤原朝長

さあ〜〜〜あはれをさあふんやきぬ
花のしき〜〜〜あはれをさあふんやきぬ

右一首能寫得原上秋景之態而更加畫且詠
物之情多景之勝縮之三十一字而無遺漏可
謂衆作中之絕唱者也

原の春をさるとりて家こころをよめは

日秋下 梵近法師

こやき野の小萩もさうさせりしは

原の春をさくとけさきさきとけし

新古今秋上 西行法師

阿久根いさし草葉地はゆめさうさ

あまう野さきとけさきさきとけし

原上秋上 西行法師

うちささけいやは秋さきさき

小萩さきさきさきさきさき

野さきさきさきさきさきさき

原の春をさるとりて家こころをよめは

日下 西行法師

あまう野さきとけさきさきとけし

小萩さきさきさきさきさき

原の春をさるとりて家こころをよめは

日秋上 西行法師

くはるるのちまゝなるまはるる

のせはくはるるやまはるる

續古方新下 順徳院所製

くはるるのちまゝなるまはるる

くはるるのちまゝなるまはるる

正保二年百廿

玉葉集秋 玉葉集秋 玉葉集秋

くはるるのちまゝなるまはるる

くはるるのちまゝなるまはるる

口を 玉葉集秋 玉葉集秋

くはるるのちまゝなるまはるる

くはるるのちまゝなるまはるる

續千載新と 續千載新と

くはるるのちまゝなるまはるる

くはるるのちまゝなるまはるる

口紙傳 口紙傳

くはるるのちまゝなるまはるる

くはるるのちまゝなるまはるる

山借入邊に長家の十巻を

續後撰集 續後撰集

多岐路の人のきくおんも多岐路の

とまはれし一きくはらひふり

日 ありつ院別南

くやみ路忠義らし葉のくはらふと

日 行のう秋とやし一はあくはん

和歌新あまのうき祝するもはり旅奇

日 旅 鴨長明

多岐路のきくあつあつあつあつ

とまはれし一きくはらひふり

新千載秋上 前上細言書教

いく夜も或るはれんくやまゆや

松のうき枝あまのうき

割秋中夏 左藤野徳老氏 呈利

やまのうき花露方しうと多岐路

よのうきもあつあつ多岐路のうき

日 秋上 法華下院別

客路野のほむわきまはれ秋と

よのうきもあつあつ多岐路のうき

日 旅 方家知臣

とまはれし一きくはらひふり

さふ多岐野のさびしきもあはれ

新後撰巻下 若菜海忠定

多岐野のさびしきもあはれ

さふ多岐野のさびしきもあはれ

日 西之住道成

はゆのあはれさふ多岐野の

さびしきもあはれ

新後撰巻下 杉阿法師

宮城野のさびしきもあはれ

さふ多岐野のさびしきもあはれ

日 原上由來 西之住道成

原上由來 義鶉多李経之詠

得地理之状旅

懐之情而を奇也今也秋晚之哀鶉声之寂

如見之李経實知原上之其人乎

ほふれのほふれ

さふ多岐野のさびしきもあはれ

さふ多岐野のさびしきもあはれ

さふ多岐野のさびしきもあはれ

日 新上 猪定院跡在若菜

風はあまの古枝の蔭にありて

日少を殘るゝ宮城野中へ

あすのそよひ

順徳院中製

あつたの蔭のまよふまよふ

あつたの蔭のまよふまよふ

口

定家朝臣

あつたの蔭のまよふまよふ

あつたの蔭のまよふまよふ

口

定家朝臣

あつたの蔭のまよふまよふ

あつたの蔭のまよふまよふ

建久二年左大将家朝臣

後遺五草下口

あつたの蔭のまよふまよふ

あつたの蔭のまよふまよふ

院の歌五首奇月前草花

宮城野のうらみまよふまよふ

あつたの蔭のまよふまよふ

讀此一首則原上沈心無人見夜月孤照錦菼

而此時颯風未至花上之白露各馬寒影來之



熊死然發其悚然生感於此是却知天上一輪月
落影而各具其清光者實道學之旨而統體各
其之意隱然乎其中矣是乃自然至其妙而著
和歌之德者豈不奇哉就中具露之句妙之又
妙者也

百首歌此中

色々一妙玉の如く秋とて
露もはゆるともやさ路の原

後系拾遺家此書

家系下

夫系集の書

家隆朝臣

宮城那のそとを吹くは秋の原

色々一妙玉の如く秋とて

建保二年内裏那奇の書

人なりとてやありそち一みやき

色々とてとてあまのゆふの路

貞永元年お身今ふ

高城那のふそくく忠とては

むりとてとてとてとて日新

秋の奇とて

うやとて野守とて藤衣

日

ちやうやむらさきとよもやせりかきん
けりてはゆし葉は露しりははきり
く月うらむくふは多岐野のしら
前條定家卿露上露家隆卿以月影之映白露
而比之敷珠玉之状及此一首亦能寫原上之
秋色来者也

後頼朝長

くやき野乃るはきりしはきりしはきり
そのあはれしはきりしはきりしはきり
けりてはゆし

白玉集

在原政仲切長

くやき野乃るはきりしはきりしはきり
けりてはゆし
此原上少即花殊多古人詠錦荻者維多詠
即荻者已少如今始見此一首

堀河百首

権信正永縁

くやき野乃るはきりしはきりしはきり
けりてはゆし
く葉はははゆし

日

在原政仲切

くやき野乃るはきりしはきりしはきり
けりてはゆし

いんごも多程と池さのいんご

日

師時

時一いんごも花ふもいんごもいんご

いんごのこもいんごもいんご

枯野

いんご

家隆

麻の房もいんごもいんごもいんご

いんごのいんごもいんごもいんご

建保百々

日

普信内侍

いんごもいんごもいんごもいんご

いんごもいんごもいんごもいんご

日

定衛

いんごもいんごもいんごもいんご

いんごもいんごもいんごもいんご

日

信成卿

いんごもいんごもいんごもいんご

いんごもいんごもいんごもいんご

日

高定

いんごもいんごもいんごもいんご

萩のり葉はほゆりふくは

日

行徳

吹向く風をせりいりかきしりも多に

ふくくやま路のあまの夕雲

日

康光

多城地やこけ入あまはれ衣より

露のけりけふの秋のむしき

松玉

善法

わくを秋まきうらもくもく神の心

きつ多城路まゝまの花さき

日

ふくや野りー多く秋まはれまの秋夜

さぬ古まきしりーくくくくく

日

みやまおをねりしりはあはれあま

きく萩のやまのあまの心

月夜集

ほ京極

あまのいりー語りさくはあまの

あの下くはあまの路まきしり

むね

家隆

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる
さうしゝるにけしきもたかくしゝる

日

多岐路は花のほろもとまじりしは

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

あふ

所集

清慎云

いしをたけしきもたかくしゝるにけしきもたかくしゝる

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

家隆卿之於松虫清慎公之於松樹法性寺之
於玉橋皆可怪

玉橋

法性寺入在室白

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

いしをたけしきもたかくしゝるにけしきもたかくしゝる

天曆十年四月廿五日卯時分念

日夏

清慎殿少卿

みやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

日萱

詠家書

法性寺在室白

みやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

うやまのしゝるにけしきもたかくしゝる

日

定家

神のまゝのまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

日

如乳法師

宮城野のまゝにまゝにまゝにまゝに

山多りのまゝにまゝにまゝにまゝに

家集

日

久美

宮城野のまゝにまゝにまゝにまゝに

行りまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

日

長治元年の月季彦知彦奇名

大に彦知

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

家隆之真葛女御之瞿麥後徳大寺之登聲盛

佐之藤袴皆此原野之實事也可愛可玩

宮城野

日

益 漢

みやまのまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

元禄二年在右大臣家命功也

夫亦を

有京景博朝臣

めけみしやけしやけしやけしやけしやけし

花の古枝しきふこふしきふしきふ

ちそ奇

日

寂蓮法師

まじりし

花

ゆき

あけし

秋

あけし

あけし

百首歌原露

日

恒之信家俊

まはさしきあけしあけしあけしあけし

あけしあけしあけしあけしあけし

光明寺入道攝政家秋合野道別秋

日

まはさしきあけしあけしあけしあけし

あけしあけしあけしあけしあけし

文政二年書

日

白鳥宗子書

あけしあけしあけしあけしあけし

あけしあけしあけしあけしあけし

晚彼博兮零露溪々于菽花上而采比之錦上
之散玉可謂奇巧能寫真情來者也庚帝之所
謂露狂千片玉者暗彷彿乎哉

山陽秋年百首

曰

秋もあはれもあはれはゆとりははるる

くはるるなまはるる多能明はるる

曰

あはれは古木のこももけりてん重なる

何れぬ風さくさくややゆりり

花玉集

けいせいのやまゆり

藤原

西行法師

うやむゆのほゆゆうあはれはるる

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

原氏初巻日記のあはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

あはれは

夫言於世上之常則富貴人之所願故於嫌疑之間暗空之中必有犯之者雖伏波之賢得譴于真珠雖王密之才所紀于四知皆所以不_本慝_本顧欺之_本繇茲也如蘓章奉正于二天包極無犯于家賊去可理清日之行也惟如元將伯顏擔頭不帶江南物只挿梅花一兩枝之言章匪性行之深又風流之高致也如今為仲之於荻根與彼老将之優何以為_本魚之哉謝_本扶之雅趣千載之_本羨談也

木下喬林

同村有平林林中建白山權現牛頭天王神祠善

遊閣古木老樹森々相圍翠松青杉鬱々相交其中辛夷單櫻殊多千葉紫綸者亦數十株春時開花于綠林之間裊香于紅靄之中望之遠則濃淡疊堆雲淺深飄素練此時遊人過客不可不乘幽真而發雅懷焉古歌多有詠鹿鳴者想夫往昔林深樹茂翳鬱蕭條且夫人居遠來往稀故自為群矣今也近于治府迫于寺院芻蕘常往經過尤多矧又林下踈濶無_本處_本藏_本班_本紋_本故今也亡矣雖然暮春盛夏綠陰濃密林下墜露依旧今亦如兩

可_本法_本身_本外_本の_本より_本なり_本け_本る_本なり

古今大奇不御歌

英さふむむむかさとち勢るやまか

不の下はゆは河鬼やまさ中

右古歌實馬得土地重陰林下幽暗而尽之今

每経樹下葉雨濃に隆露濕衣屢追憶此吟情

者多千載之識也

新御機張四

平政下邦

ふみ地地のあはれりぬくやゆふはゆと

やうくくくくくあきかはるあはれり

新御機張とよきやせきりゆふはゆと

續松遊秋上

今上天皇

こやき野のあの一とあといろく

くはるをまきふ秋とまきり

秋は松遊秋上

新御機張者

やまきりあの下はゆに多りぬ

いづ秋とふかた書を急か

玉葉集上

新御機張者

秋とふかた書を急か

あの下はゆに多りぬ

新御機張者

口史集

源清室朝臣

秋きあもふゆのちりもやまもさるももれもあふ

くやまのちりも

山は万多き身もかり色け家時

澄ね秋也秋上 山に信あゆ

くやまのちりもやまのちりも

ふのちりもゆりもあふれん

日 春宮史文公

まむ月のちりもやまのちりも

あふれもあやもあふれ

日

年貞宣

くやまのちりもあふれ

あふれもあやもあふれ

あふれもあやもあふれ

新千成夏 中務大臣宣

あふれもあやもあふれ

あふれもあやもあふれ

能寫得木下夏雨之景氣を奇巧

新物遠秋上 法下宣

あふれもあやもあふれ

ちいさくくちいさく

口難上

雅成親王

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あふあふあふあふ

新續古今集上

希冬漢新方

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下

口祈上

恒信家尹

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

法華歌万巻歌部

月清集

恒信家尹

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

あつたきつきのあの下あやたきあふりまをま

松尾五郎

恒信家尹

多傳師乃山のりあり

あつしやまは法家なるり

形法師

いふやふいふのりあり

いふやふいふのりあり

女中

夫亦 人丸

いふやふいふのりあり

定家之杜鵑頓阿之飛螢人丸女即花今猶往

日但女即花を多見之

白山神祠

在善遊堂東林中白山乃神書曰伊弉諾尊至伊

弉册所曰吾當留此國不可共去時菊理媛命有

白事伊弉諾尊聞而善之乃散去啓蒙曰白山姬

神社在加賀國石川郡一宮記曰伊弉册尊也上

社菊理姫改曆曰靈龜二年丙辰顯形云我當山

地主伊弉册岳跡也又左峯老翁現云吾白山輔

佐也稱小白山又右峯老翁現而云吾白山輔弱

也即大己貴岳跡也不詳自何代祭于此地也

白山神

或曰此所非祭白山焉往時祭志波彦神之地也
後人不察令鄉俗失神号焉夫志波彦神者宮城
之大社所以國主重之州人崇之也考之古書源
重之與州刺史也自三月赴任國之祭祀而遇雪
之歌見于本集小鶴詠想夫刺史當必閱其大社
之祭礼職也因茲以冒雪而往是乃祭其神之證
也矧又如今鄉老傳神号稱焉白山乃波多彦神
社也是誤其文字併失其神名者是亦其證也
此神祠以二月三日而行祭礼淨屠徒奉之神人
從焉先是二月二十五日騎射輩會の司堀江氏

世掌宅而享奠鳥饌曰潔齋會自是相共之東俱
濱曰之濱有各俗潮水還直入馬場今僧舍各俗
也坊舍豫齋戒三日午時國分寺僧徒學頭院主
別當率三十四坊而讀經于白山拜殿神人舞蹈
于社前然後有流鑄馬五番此祭礼也古來地主
國分氏司之依旧例而其故家遺族臣勤之曰俗
相分其次列栞田北日鶴谷氏世預之鶴氏相繼
精騎射此日每驚人其體勢也觀女衣而表素
袍戴組檜笠佩鹿皮行騰擗彫弓而乘駿馬古所
謂羽獵之旧制曰之持袋束者是也設的以割檜

以竹于拜殿以南的司堀江氏立于此射徒並馬
于社畔擊大鼓而待其捲的司相親揮揚金扇而
麾之於是急鼓聲而進馬ウレミチ奔馳如甚射徒奮矢
去如其二野亦乃舉其的而投衆群稠人之中各取
宮城兩郡農夫預結黨作隊期輸贏焉此時也一
直逞膂力一味出心肝而爭之南北也所以因勝
負而驗其年租之豐凶而自古之例也此義畢了
僧徒神人至于善遊拜殿有大平樂僧徒着戎衣
龍王納蘇里神人被假等舞蹈自此其徒巡行堂
上而畢之斯日也州人為群石影堂下社邊高賈

成市男女如稻麻時暖霽融、彩霞簇、樹間之
白櫻林中辛夷芍可愛野外拾翠原上踏青者殆
踵相望晚來家々扶得醉人歸

祇園小祠

在白山社南鄉人曰之天王役徒萬藏院者司之
夏六月十五日祭之

善遊堂

在白山社西未詳何人經始元一內殿置藥師脇持菩
薩及十二神將相傳俱是運慶之作俱本尊乃闍
浮檀金故滋帳祕而不發有二王門真像亦前作

同形質，歲生意如神。慶長九年甲辰，黃門君造
改宮社堂宇，令新野宮內左衛門元氏白石縫殿
人重佐監之，持人泉州比根人駿河次銀治嶋
田搦八郎次繼勤。十二年丁未秋八月十四日
落成。令國分考九郎盛重主其事。如今往昔，旧廟
殿社古瓦遺礎，往往猶存焉。其古瓦其制高古，綴
其表細布其理好，事
之徒彫
而視之

國分寺

建寺以脩之号，金光明四天王護國山國分寺。
學頭其寺在院主在別當在善遊，其堂西南俱勤寺務，其

國分寺

属坊舍有二十四區，逐年巡執，奈祀事相傳，聖武
帝天平年中詔，每州所建之一也。其後鎮守將軍
藤原秀衡甚好佛法，建寺觀僧房，頗極壯麗。設長
堂迴廊，而及尼寺。後傾倒荒廢，却又其間及兵燹
等灾，予

和漢合運，曰四十五代聖武帝天平九年丁丑，每
州建國分寺。又十一年始建，每州固分尼寺。不
續日
本記
續日本紀，聖武帝天平三年辛未三月丁丑詔曰：
每國令造，釈迦像一軀，挾持菩薩二軀，急寫大般

若經一部

又曰同十三年甲戌正月丁酉改太政大臣藤原朝臣家_返上食封五千戶二千戶依_旧返賜其家三千戶施入諸國國分寺以充造丈六佛像之料乙巳詔曰朕以薄德忝承重任未弘政化寤寐多慚古之明主皆能先業國泰人樂災除福至修何政化能臻此道頌者年穀不豐疫癘頻至懸懼文集唯勞罪已是以廣為蒼生遍求景德故前年馳馭增飾天下神宮先是九年十一月癸酉遣使去于畿内及七道令造諸社去歲普令天下造釈迦牟尼佛尊金像高一丈六尺

各一鋪並寫大般若經各一部自今春已來至于秋稼風雨順序五穀豐穰此乃微誠啓願靈貺如答載惶載恐以自寧_按經云若有國王講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我等四王常來擁護一切灾障皆使消殄憂愁疾疫亦令除差所願遂心恒生歡喜者宜令天下諸國各敬造七重塔一區並寫金光明最勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明最勝王經每塔各令置一部所冀聖法之盛與天地而永流擁護之恩被_出幽明而恒滿其造塔之業_魚為國花必擇_好處實可長

人近人則不欲薰臭所及遠人則不欲勞衆歸集
國司等各員務在嚴師無_レ_レ潔清近感諸天庶幾
臨護_レ布告_レ遐迩_レ令_レ知_レ朕_レ意_レ
又每國僧寺施封五十戶水田十町尼寺水田十
町僧寺必令有二十僧其寺各為法華滅罪之寺兩寺
相去宜受教戒若有闕者即須補滿其僧尼每月
八日必應轉讀最勝王經每至月半誦戒羯麻每
月六齋日公私不得漁獵殺生國司寺宜恒加檢
校

夫先王之於國家厚施仁政薄致稅歛則民人親
於上而社稷亦自安今帝以未弘_レ政化_レ寤寐_レ慙_レ古
之明王以年穀不豐疫癘頻至慙_レ懼_レ文勞_レ罪_レ已_レ是
可謂善端之發也然則常恐懼修省以隨_レ于_レ天理
應_レ于_レ人望之政自然天地位萬物育矣伺妄詔_レ于
天下或造無用之佛像或寫無稽之偽經以為因
緣風雨順序五穀豐穰此乃微誠_レ啓_レ願_レ靈_レ貺_レ如_レ答_レ
且令天下諸國各造七重塔及寫_レ光明_レ最_レ勝_レ法_レ華
經等剎俾_レ男_レ女_レ浮_レ圖_レ混_レ合_レ雜_レ居_レ紊_レ人_レ倫_レ敗_レ世_レ道_レ之
大弊莫_レ大_レ焉_レ矣_レ可_レ歎_レ矣_レ况_レ亦_レ後_レ世_レ妄_レ讀_レ此_レ詔_レ則_レ或

啓時君佞佛而廢道懷利而求福大費財賦人之
心仍論其義于此云
或難曰如今細讀其記詳考其事此時帝之於天
下徒非傾心浮屠費財于塔宇焉於神明之義亦
用其心竭其力以致至誠故馳驛增飾天下之神
社者亦至矣豈偏以此非義之哉曰帝之崇神元
我國之社稷宗廟是職分之所當為矣以此細事
而許心術之大者耶其攀也是則是未歸其至當
焉想夫其衷誠實出於真實無妄而為蒼生求其
多福則可矣若其心不在茲却出於逞其所好快

其所欲則豈非私意之私者耶今視其迹造佛象
已及丈六且置僧尼雖多縱令造象設僧豈斯其
大望其衆哉無厭之機於此是乎可視未幾廢帝朝
作丈六弥勒於列國後世天子諸侯守護州牧及
士庶人自是旋至造立數宇之堂舍而不惜財用
供養巨萬之僧徒不諱于心志者於此為大其濫
觴焉其作備亦發于此無厭之害可不慎耶
又曰四十六代孝謙帝天平寶字二年戊戌七月
戊戌朔為令朝廷安寧天下太平國別奉寫金剛
般若經三十卷安置國分僧寺二十卷尼寺十卷

恒副金光明寂勝王經並轉讀

又曰四十七代廢帝三年乃天平字四七月癸

丑設皇太后七齋於東大寺並京師諸小寺其

天下諸國每國奉造阿彌淨土画像仍計國內見

僧尼寫稱讚淨土經各按國分金光明寺禮拜供

養養人自其

又曰同天平字五年辛丑六月庚申為設皇太

后周忌齋令天下諸國各按國分尼寺奉造阿彌

陀丈六像一軀脇持菩薩像一軀

又曰五十六代桓武帝延曆元年壬戌十二月壬子

勅太上天皇周忌御齋當今二十三日宜令天下

諸國國分尼寺見僧尼奉為誦經焉

按書記正史說如此問之寺僧則無執迦及阿

彌陀七重塔夫金光明等号又不讀寂勝王經

法華經等恒以仁王經藥師經轉讀焉且寺僧

又自誇說于人曰我山之善遊迺聖武帝之遺賜

也未知丈六佛像及往時之勅旨其無智妄誕

之甚實可晒哉

尼寺

在國分寺以東按合運而考之則天平十一年已

ちやまやまにまゝふふ麻をふりあはる
 布荒れをぬきしはゆやをきき
 新布の歌と
 秋の歌
 ちやまやまにまゝふふ麻をふりあはる
 布荒れをぬきしはゆやをきき
 新布の歌と
 秋の歌
 ちやまやまにまゝふふ麻をふりあはる
 布荒れをぬきしはゆやをきき
 新布の歌と
 秋の歌

多岐の
 秋の歌
 新布の歌と
 秋の歌
 ちやまやまにまゝふふ麻をふりあはる
 布荒れをぬきしはゆやをきき
 新布の歌と
 秋の歌

新好歌集抄上

恒と恒篇子

多財のくちくち庫裏のまをり

車取のれ少くまゝ 幾とに

有京世能

如も〜とあまのこゝろをいふ

印何れの萩やまはまのまをり

建保三年 乙未 後

あま山集

後山山集

こやまのけ〜あまのれ少萩下

葉ののり〜いふまゝ月歌

夕歌五十年日あき

月夜集

恒新極

古々此のあまのれ少〜

おれ〜幾と日ま〜

詠花多 初寄 十二首 麻呂集

吟道思草

定家

はま〜むけぬい〜

や〜〜り〜

水空風影〜海〜

〜やまのけ〜

玉女... 少... 秋...

秋... 秋...

秋... 秋...

秋... 秋...

按京極黃門二首彷彿詠詠鄉名之意其他共徒

讀本荒之義而不干涉里名焉可惜我下好忠

歌專為燒痕之菽

建保三年丙辰... 秋...

家咏原

家隆

秋... 秋...

秋... 秋...

秋... 秋...

日

秋... 秋...

秋... 秋...

秋

秋

秋... 秋...

秋... 秋...

宮千代墓

鄉人言木下東北五六町往昔有荒墳其遺蹤也

其遺蹤也塚上生花草稱花紫青葉紫莖初秋着
花其花如豆花其色紅紫如糾繩相似相傳往昔
松島寺有少年曰宮千代容色艷冶有才而貴重
後死于此野焉里人哀之為一推塚窮子牧童每
過墓畔聞塚底有人語吟声最哀怪怖告之人往
窺之果誦和歌前聯曰月者露者葉葉耳寓假
里天吟畢而大息復有嗟嘆之声聞人或恐怖或
隨淚焉後松島寺僧徹翁者往足下聯吊出魂曰
其古曾夫与宮城野乃原自是鬼吟熄行路無恙
按宮千代元松島寺喝食御嶋有經歷之遺蹤

音信州有寺寒夜寂寥霜月照窓緇素相集不
堪幽闌設歌會有一少年得歌句若吟已久傍
人問之曰得下句未及上聯吟曰今宵乃月者
空耳故曾阿礼衆難曰月本在天矣亦隨地乎
年少赧然發赤色自經死于房內尔来幽鬼屢
誦之悲吟愴々但有其声不見其人聞者膚生
粟鬼為搖夜々哀吟不絕寺中怖畏殊甚遂發
疾之死者相繼遂為廢寺自是夜雲之暮以腥
風之浙々鬼必出且泣且吟近鄉無行客古路
絕人蹤有偶過其地聽悲吟者其人不畏鬼物

相向問之鬼曰我素無害之意得其人而廣
成之則足慰之故屢出為悲吟哀誦以族其人
然無敢向我而吊其愁恨矣幸得子也請足成
之以慰吾鬱結焉客又知俳歌乃廣上聯曰池
水乃上者冰丹鎖羅連帝不是鬼謝客曰今夜
遇君以適吾願矣遂失其負也與客千代事相
似妄誕奇怪不足言之且坐客難月在空語唐
鮑溶詩明月在天將風管者亦難之耶
太平廣記曰鄭郊路逢一塚為詩曰
塚上西竿竹風吹常島
塚中入廣曰下在百

年人常眠不知曉此亦同日之談也
西陽雜俎曰寒食月夜人見於楚吟詩云
流水涓涓荇發芽織鳥雙飛客還家荒村無人
作寒食殯宮空對棠梨花是乃鬼詩

迫更無慈愛之意一日婢小鶴立苗田畝頗大負
子概種焉不遑乳之遂令背後如兒飢死矣其田
畝今
在利府以北春日社邊田中亦後不堪其訶責母
有亦投身于此湖水死焉鄉人曰之小鶴湖近年水
涸而為野田定可惜我仍遺名于村落耳

三月三日遇祭祀于雪而
遇此池畔矣此地三月之祭祀無所考于他蓋
木下之祭祀乎其祭時也蓋祭志波彦社者守
此神乃宮城之大社為刺史者豈茫然外其祭
事哉斯時重之須在于多賀城中仍欲侵雪而
之于木下焉路必經過于池畔者也按編和漢

原々々集

日
あをぢと、おのそのやろりるはるの比をいいて年
梅重之為奥州刺史此記三月遇祭祀于雪而
遇此池畔矣此地三月之祭祀無所考于他蓋
木下之祭祀乎其祭時也蓋祭志波彦社者守
此神乃宮城之大社為刺史者豈茫然外其祭
事哉斯時重之須在于多賀城中仍欲侵雪而
之于木下焉路必經過于池畔者也按編和漢

之乎木下焉路必經過于池畔者也按編和漢

乃月乎... 皇

曰... 升之の升

曰... 友教純

曰... 乃月乎... 皇

曰... 中乙此

衣... 以歌意考之則俱是起居字當其義而曾無與字義矣然則為別處分明也決當取起居之義

矣與字亦拙小町歌而當作熾升矣於與字曾無于涉也十三夜下注加之字者非是

都島

未詳其地或曰樵生郡官戸島是也島上景致絕勝比之京師之華靡且官戸都音相近故誤其稱呼戸音許俗人合訓音而呼官戸直為皇都後人不察誤所以訓養也登者也或曰其說非也其島畔別有稱皇都者鄉人誇言往古此佳島奉勅蒙其名者也仍有皇都島名是亦不足取焉以小町歌考之則熾升都島元一府而豈異其地故熾升

以八幡地為是則此島矣。隔數十程。耶且夫熾井。則宮城也。都島則挑生而間海岸。不合古歌事實。豈夫然耶。然則八幡名蹟池為熾井石為都島。而似無障礙矣。識者辨之。いゝ〜渡身國〜里〜地〜歌〜

小町

此中抄て〜とやく〜お〜い〜ふ〜あ〜の〜あ〜り〜

右歌及詞書見伊勢物語第百十五又古今集為小町作

考あ葉多紙 様倍少報

わ〜と〜あ〜と〜や〜お〜の〜あ〜て〜あ〜を〜あ〜る〜あ〜り〜

八幡古館 在八幡村伊澤四郎家景家臣八幡兵庫居館也

末松山

八幡村中有寺曰末松山鄰障寺。林有高五丘。上有青松數十株。是往昔舊地。而去海濱已十餘里。遠望入波濤。所望神花。開大六天。杳島諸山葛。

抄本一冊、紙に墨書、

一冊、紙に墨書、

東の都の御成敗式目、

紙に墨書、

しるし、

あはれ、

こころ、

けい、

あ、

い、

抄本一冊、紙に墨書、

一冊、紙に墨書、

あ、

い、

う、

え、

お、

か、

き、

抄本一冊、紙に墨書、

侍〜の事も多岐の思ひ出さるるに成る〜は
—素性法師うらたのあか〜と申おふり
おしけふとて〜と申おし〜と申おし〜と申
東の書のは特〜と申おし〜と申おし〜と申
乃其書けりよりの事とて神人なる事とて
侍〜の事も多岐の思ひ出さるるに成る〜は
の事とて〜と申おし〜と申おし〜と申
ほととほ〜と申おし〜と申おし〜と申
此は法師の事とて〜と申おし〜と申おし〜と申
—又なるの事とて〜と申おし〜と申おし〜と申

ういづつとて侍〜と申おし〜と申おし〜と申
せ侍〜と申おし〜と申おし〜と申

東の杉の事とて〜と申おし〜と申おし〜と申
とて〜と申おし〜と申おし〜と申

侍〜の事とて〜と申おし〜と申おし〜と申
うら〜と申おし〜と申おし〜と申
きん〜の事とて〜と申おし〜と申おし〜と申

彼人

〜と申おし〜と申おし〜と申おし〜と申
とて〜と申おし〜と申おし〜と申おし〜と申

おはらまのりおはらまのりおはらまのり
おはらまのりおはらまのりおはらまのり

元年のふゆめ

おはらまのりおはらまのりおはらまのり
おはらまのりおはらまのりおはらまのり

おはらまのり

おはらまのりおはらまのりおはらまのり
おはらまのりおはらまのりおはらまのり

おはらま

おはらまのりおはらまのりおはらまのり

おはらま

おはらまのりおはらまのりおはらまのり
おはらまのりおはらまのりおはらまのり

おはらま

おはらまのりおはらまのりおはらまのり
おはらまのりおはらまのりおはらまのり

おはらま

ふらふらとありて人々を招きたる神原の事

八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

口説に 神原の事、人々を招きたる神原の事、八月十日

楊子仲別名陸奥由り、はるばる時を以てし

かきつけあゆ

かきつけあゆ

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

神原家長

いふに、神原の事、人々を招きたる神原の事、八月十日

神原家長

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

神原家長

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

神原家長

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

神原家長

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

神原家長

口説に 八月十日、おれが勢を以て日吉とてしるす

いふに、神原の事、人々を招きたる神原の事、八月十日

此等家人のとりはらわしむる

拙寮使別光

口取中
拙寮のこころがけの原をてきりてふくむる神を

てきりて
左近将濟時

伊勢の神をてきりての末に神を好むは

人の心をついてはらわしむるは
拙寮の原をてきりて

行路

拙寮の原をてきりてはらわしむるは
拙寮の原をてきりてはらわしむるは

長徳和志

東の拙寮の原をてきりてはらわしむるは
東の拙寮の原をてきりてはらわしむるは

為家

拙寮の原をてきりてはらわしむるは
拙寮の原をてきりてはらわしむるは

春宮をてきりて

口取五
リ年此むすは拙寮の原をてきりてはらわしむるは

左政大旨

拙寮の原をてきりてはらわしむるは
拙寮の原をてきりてはらわしむるは

九條大長

拙寮の原をてきりてはらわしむるは
拙寮の原をてきりてはらわしむるは

一條大長
大納言典侍

拙寮の原をてきりてはらわしむるは
拙寮の原をてきりてはらわしむるは

影の森まじ

源信杉朝信

いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

ちは行光

ふきくちなるつふあまの松神の信と根つら

大納言朝光

口執中
おやといゆいぬの松の東とほほぬきくちなる

従三位道子

口ま下
東の松咲をも夏の原らるるふくやほほぬきくちなる

右家朝長

口秋下
東のまらぬ松とけりなまらぬ松とけりなまらぬ松の白

入道二品親王道卿

いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

中御満子女王

口別
いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

従三位満子

口冬下
いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

津守國朝

いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

右所門入道前内大臣

いづれと東の松ふかまらたるは信とよりあまやうたふ

西之住知家

いまだまゝのまのぬりし東の松をうりしけの山の端の月

中宮更ら宗母

かゝるこころのまのほのゆゑをまのまの東の松の

修子内親も

口老
いふことおびしき東の松老の松こそやしきいふこと

権右内亮宗重

口縁
まの衣をきき下院とよまるといふまのまのまのまの

与子内法師

口息
おぬ人それこそをいふまの山といふまの山こそをいふまの

各所百多教令

順徳院御製表

尾ぶじとや東の松のまの松のまのまのまのまのまの

定家

口
いまだまゝのまの松のまの松のまの松のまの松のまの

家隆

口
いまだまゝのまの松のまの松のまの松のまの松のまの

長子

いまだまゝのまの松のまの松のまの松のまの松のまの

家隆

いまだまゝのまの松のまの松のまの松のまの松のまの

仁安二年二月清輔朝臣家秋久

御色書

從三位相政卿

口
奉書の事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
此款判書儀奉り申上り申上り申上り申上り申上り申上り
海の時り事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
ハ海一浪の事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
の事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
一しりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
しりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事

の款一奉り申上り申上り申上り申上り申上り申上り
此事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事
しりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事

費

口
奉る所は其の由事なるを以て其の事

信

口
奉る所は其の由事なるを以て其の事

元

口
奉る所は其の由事なるを以て其の事

此事なりしころに奉る所は其の由事なるを以て其の事

如

者相同

宗久住り一みちの國多賀の國之府少とけり也
是より和州地を經りて少の國を中へゆり
東の橋より多の地なり也

接宗久親、經遇其地矣。十府池戸絶地皆近其
行路矣。不遺其吟不認其語哉。考其取途之地
則南行而北歸者也。然往時之道路与今方隅
異乎矣耶

途絶橋

過今市河橋入岩切農家處有小地鄉俗曰之轟

行地是古所謂途絶地也。土橋之極而短狹者也
誤呼其名矣

橋より上りて少の地なり。上は河院少人々
とありて少の地なり

橋名絶言字家卿

是地の人々此の地を少の地と云ふなり。少の地
は少の地なり

いりて少の地なり。少の地は少の地なり。少の地
は少の地なり。少の地は少の地なり

後轉那臣

地生好管而得地名乎盖郷俗以此制筵席而為
産業自是人稱之利符管席亦無妨其事實也據
十編之說則採生于此池中者而土人編席以備
庸貢者乎故存而說以待識者

よみ人

かろの池と婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

氷隔池上といふ

大池を預信

水も池のほとりにはいづれもはもさけはと婦の昔も

新撰六帖

冬後朝記

おりのいと婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

小侍従

ふちりも婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

保唐

いづれも七糸の糸を移さるる昔も

歌捕

かろの池と婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

よみ人

かろの池と婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

くある

教長

かろの池と婦の昔も七糸の糸を移さるる昔も

所集

此集之文其詞多歸のよかこと多しや初て曉るべきもの多し

後多ね院御製

右歌專詠十符之意但此製作主浦景之意

弘安百首

まればかりしぬの浦を言つれも沙田のたのしみ

中務々れを家の中そ秋分秋風

弘安百首 長明

弘安百首

まののく此中向の暮しもの事そ初て秋分秋風

弘安百首

弘安百首の事そ初て秋分秋風

右所低書三首与十符池不合焉称野田咏浦景
人等尤可怪又舉之有以橘為仲憶京城之歌而
以此地者然其詠非指斯地而詠之唯所以望于
武隈東瀛而發苦吟者也按往時為仲為當國刺
史而在名取客館久矣行李悄然客居無聊况亦
值中秋清明之夕而望極浦之遼遠乎於是憶京
師而難息忽發相思之情宜哉此際不可無愁吟
焉胡取途于岩切之遙而弊吟于他處之寂乎且
夫經信之作以水滴池上而為題焉此地非江濱
也不可疑仍以為仲之吟而属名取之海上以經

信詠而附宮城之池畔則兩得其地矣為仲之作
對海上悠々之象而發客情之無窮吟眸之不及
以遠且遙取之歌句豈為地名故遠與十符訓相
近後人誤混一處雖載名勝之目於遠浦者其名
蓋起為仲旅懷遠望之情與此地實指其跡者尤
異也

蘇影池

在神谷沢村有小池相傳前件所謂小鶴者移貌
為靚粧池也岩切以北松島道路上有小坂是亦
謂靚粧坂是也

南宮

在今市河北古有南宮神祠是亦塩釜末社也
神社啓蒙曰南宮神社在美濃國不破郡一宮記
曰金山彦命也社家註記云南宮者金山彦命而
大神也非金神司離火南方故名南宮抑南宮者
陽神而居南方文武兼備故國家崇貴叙正一位
勳一等竒勳中天武朱雀朝施功於我邦云
多賀城或曰末篇高森多賀國府相同且高多賀訓同國府謂其地實同地也
在市川村南有往昔城堡古址上有多賀神祠前
代之古瓦遺礎往々有之好事者取斯地及木下

南宮

古瓦以為之硯，堅剛細密，足書房具矣。瓦上有紋
理表，若鑿跡，裏似細布也。城壘年曆詳，壺碑上
續日本紀曰：聖武帝天平九年四月戊午，陸奧持
節大使藤原朝臣麻呂等言，以去二月十九日，與
鎮守將軍大野朝臣東人、劉陸奧國多賀柵、
又曰麻呂等師三百四十五人，鎮多賀柵。
又曰同月十五日，將軍東人從多賀柵發，
又曰四月一日，東人到出羽國大室驛，入賊地。且
開道而行，但賊地雪深，馬芻難得。東奧深雪至孟夏未消，於是可
視故同月十一日，東人迴，至多賀柵，自導新開道。

道，柵百六十里，或刻石伐樹，或填澗，疏亭，從賀美
郡至出羽國最上玉野，八十里，雖柵是山野，形勢
險阻，而人馬往還無大艱難。從玉野至賊地
又孝謙帝天平宝字四年春二月丙寅，陸奧國調
庸者多賀以北郡，令輸黃金，其法正丁四人一兩
以南，諸郡依舊輸。古之法，是亦可見。
又光仁帝宝龜十一年二月丁亥，上治郡伊治公
岩麻呂及率徒，殺按察使紀朝臣廣純於伊治城，
獨唯女大伴，宿祢真網開圍一角，而出獲送多賀
城。

同年七月甲申勅曰為討逆虜調發坂東軍士限
乘九月五日並赴集陸奧國多賀城其所領軍糧
宜申官送兵
同年九月己未勅將軍為賊被斫致此逗留以今
月不入賊地宜居多賀玉造等城能加防禦益鍊
術
又桓武帝延曆四年四月辛未陸奧按察使鎮守
將軍大伴家持等言權置多賀階上二郡
同七年三月庚戌軍糧三萬九千餘斛仰下陸奧
國運收多賀城又輸二萬三千餘斛並塩仰東海

東山北陸等國限七月以前轉運陸奧國並為未
年征蝦夷也
同月辛亥下勅曰調發東海東山坂東諸國步騎
五萬二千八百餘人限未三月會於陸奧國多賀
具點兵者先盡前般入軍經戰叙勲者及常陸國
神賊然後簡點餘人堪弓馬者同月乙丑以多治
比濱成紀真人佐伯葛城入間廣成並為征東副
使以紀古佐美為征東大使是乃欲攻膽沢城也
事見伊
同八年三月辛亥諸國之軍令於陸奧多賀城分

道入賊地

後鳥羽帝文治五年秋八月十二日賴朝自柴田郡船迫至多賀國府居三日

先是言多賀者稱柵編木為之塞柵者也光仁

以來以城而言以東人所築而稱之後鳥羽以

其來以國府言稱多賀古城者則市川古碑在處

而稱多賀國府者則岩切河北地十府池上地

同以此可弁其地
同年十月朔賴朝從平泉到多賀國府日賞吏搞

同六年正月恭衡家臣大河次郎兼任欲踰出羽

大關山而赴多賀國府到于鍾倉

宗久紀行ゆみりの國多賀地國府ゆきゆきゆき

多賀國府地今市以北岩切山陰古館是也本

号高森後迁市川多賀城于此尔來呼高森而曰
多賀城呼利府而曰多賀國府
一説曰文治六年三月十五日賴朝令伊沢左近
將監家景主當國來居宮城郡高森仍家景以高
森稱氏焉時俗又謂之留主殿者居館雖在高森

其任以主^久多賀城也據此說則文治中以呼高森也賴朝次軍之地今市川多賀城也是乃往昔治府仍稱國府者不可疑

多賀神祠

舊在多賀城址中神名秘書曰多賀宮伊弉諾尊洗右眼目以出神号曰豐受^{イハヒ}思^{イハヒ}魂亦名伊吹^{イハヒ}多主^{イハヒ}神是也

按名取郡亦有多賀神社風土記曰所祭伊弉諾尊也雄略五年奉主田加神禮

自宮城野以下至多賀而有稱八境者謂之宮

城八景仍得天漪翁述作聊載之此焉

宮城秋月

高玄岱

渺然無際野原秋天上挂枝月下秋千萬錦叢綉不盡蟲声和露一綢繆

木下晚鐘

萬木遮天大作群相摻密蓋幾重雲釀成玉露繁於雨撞出鐘聲帶夕照

本荒夜雨

一抹本荒冷濕烟秋花可惜自相憐任他處籍夜來雨斷送淒涼沒有邊

榴岡夕照

城東十里有高岡躡躅當年映赤裳人去物亡空
寂、管公廟古照斜陽

玉田落鴈

九疑拔得七疑峰移置吾東欲擬封下有玉田橫
野濶呼群落雁侶相從

香葉晴嵐

東皇早占葉青、嵐氣分晴翠靄停城謂仙臺真
萬古遙知上象應奎星

松浦遠帆

征帆片片莫知涯出沒波濤望眼賒還去還來松
浦外由化風信各歸家
多賀暮雪

古城廢壘十符池多賀森邊暮雪奇聞說源君稿
民處至今遺惠遠相思

壺碑

歌托作壺石文或作碑風土記作坪碑壺苦本坵
音惘爾雅宮中術郭璞曰術閣間道詩大雅其類
維何室家之壺又居也俗作壺碑非也壺洪孤坵
音胡酒器坪蒲明切音平地平處按斯碑也以往

時在城中館庭而名壺碑者也。在市川村中多賀城址其碑文詳于圖上。想夫或達境內反命于京師告逆賊蜂起于隣國或募兵集徒之切急遽倉卒之忙預致其備所以量遠近考多寡定日子許未往而擇緩急遲速之設也古入所謂凡事預則立事前定則不困者於此碑亦可見。日本風土記百六曰陸奧國宮城郡坪碑在鴻之池今廢為故鎮守門碑惠美朝藁立之見雲真人清書也記異域本邦之行程令旅人不為迷途。

壺碑圖

自碑首至石根六尺五分石圍九尺六寸八分石基六尺二寸七分碑後石形三稜

多賀城

去京一千五百里

闊二尺六寸四分

去蝦夷國界四百廿里

去常陸國界百十二里

去下野國界二百七十四里

去韃靼國界三十里

此城神龜元年歲次甲子按察使魚鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝藁修造也

天平寶字六年十二月一日

此間二尺

西

按神龜元年甲子廼丁。聖武帝元年。天平寶字
六年壬寅丁。廢帝四年。
又續日本紀大野東人聖武帝神龜元年為按
察使陸奧守鎮守將軍授從四位上勳四等。天
平十一年四月壬午為民部卿兼春宮大夫。
藤原惠美朝臣朝彥孝德帝天平寶字四年正
月癸未為陸奧國按察使兼鎮守將軍授正五
位下同月丙寅授從四位下同五年十月癸申
為仁部卿陸奧出羽按察使如故同六年十一
月丁酉為東山節度使十二月己巳為參議

亞碑在子我東奧也。久然累世無人識其神妙，
者空蕪沒于古城艸莽之中者幾千年。水戶
黃門君請其文字，吾。太守綱村君令儒臣田
邊氏雙鈞以遺焉。未及石刻，尤可惜矣。元祿十
二月与江定守及亡子義方經此地，以義方術
而打之去，閱其文字，筆勢高古，字體寬闊，殆非
尋常書考之中華。則蘓長公趙雪之上而陶弘
景顏魯公之亞也。未嘗見日本之字態，於是切
怪我朝有此鳥跡而未嘗以此傳其妙，遺其谷
于後世矣。仍告之平信，如是亦驚其妙手時編。

本朝書史乃收之篇中予亦屢示好事之徒說
之談本朝希有之書亦後州人略知其奇跡也
正德甲午春當太舟君命僕雙鉤以進之質
筆者姓為而得其左證于風土紀殘篇中始知
見雲真人筆痕可謂得其時而顯者也

神仲お云

い 終やふのさぬのさほくひんさる様ありと云ふ事
昭昭なりし様もまた後集のやうな様との名
ふしりし事のみをいふは但田村の筆に依るの
時よりさしたるものなりとの中央のよりし書に

けきしもしる文よりいふは此説大非也

後集は臣の中一ハ石の角長を四つに分けて
又えのほもくはくを此にほるといふ事
を法ともしりし様も私にみちの國りよのさる事
と名その為のせりてあふとくは後集をい
サリし事の中央のよりしはふしり

按此説皆失其事跡矣按圖上而可知異説
前の右側正意圖よりみれば上はしるし中は
とくはしるしはのさる事はしるし
此

前右大将頼朝

物あや
みちぢくのいりてそのふいふをたぬかたはしめてまゝのまじ

件ノ實

いし給ふやげのせめてぬのまじしおひいんをたぬかたはしめてまゝのまじ

題 昭

おひいそまゝのやむかたはしめてぬのまじしおひいんをたぬかたはしめてまゝのまじ

懐 因法師

良玉
のりてかゝゆりしそまゝのやむかたはしめてぬのまじしおひいんをたぬかたはしめてまゝのまじ

西行法師

四糸集
みちのりやゆりしそまゝのやむかたはしめてぬのまじしおひいんをたぬかたはしめてまゝのまじ

意 園

物ま
みちぢくのいりてそのふいふをたぬかたはしめてまゝのまじ

清輔朝臣

夫よ
いし給ふやげのせめてぬのまじしおひいんをたぬかたはしめてまゝのまじ

寂 蓮

法皇のまのいりてそのふいふをたぬかたはしめてまゝのまじ

題 手臨壺碑見遺

高玄岱

聞道千年壺石文摹臨一紙致爭分真人鉄画蒼

然古想見隆頭照夕曛

坪浦

未詳其地多賀城邊往昔有海水之去來也以浮島之地勢可考之風土記曰坪浦在松山之右出温湯不知指何地矣

浮島神社

在浮島村多賀城東鹽竈西南往昔海潮來其下者考古人之詠而可視如今變為野田之上有一高丘、上有神祠是乃浮島明神也不詳祠何神也

浮島村多賀城東鹽竈

浮島明神也

夫木集浮島陸奥一駿河

之くすのけり人少ぬきけりけふ衣ととあり此のめり成とけりて古寄贈之状可視于此

能空

ワシは海の浪もぬきぬき海島よりけり心をとせてあのみん

源順

日孰意
さあちの人のこころふくぬきもさるる此島に名のりて
中洲をあた持とてけり

山々如王

新多我張
せり此のふくは海島よりけり

浮島神社

いざよは多身のうたふふとくつんそのうたのそとをきつり

按圖羣國名蹟以命佳作可謂好事清翫也但
躬恒歌詠似發述懷其意不可曉下同

村上の先帝此所時の所屬風國くおくれを
かせほいさうくはるかたの中務

多の平れ思ひのうたやうたのうたのうたのうたのうたの
一條長政を位家隆のうた

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

家隆のうた
源仲正

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

野長明

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

平林平

あまの
つらつらのうたのうたのうたのうたのうたのうたの
中務風くはるかたのうた

長久と平家宣のうた

つらきまはほ島光くは海士人の心の中のものにあらぬ

宗集

あつたのち北の流をほい多ふねに根をさす

家隆

仲の風あふ多しとて根を月の水ふりてはのまら
面和久橋 當作吹面橋

在留谷村有一坵橋面和久橋是也天和四年甲
子二月依命巡視宮城郡中勝蹟里老示其地
且言土人誤曰阿倍松橋視之不見有一楓樹於
是惜欠其事實三月二十日歸城府達之回命出

納司松林仲左衛門及郡司而即日植楓樹五株
於橋畔且橋東小山亦多植楓樹以為紅秋之設
焉尔後過二十二年再經歷其地其猶存焉鄉人
橋呼紅楓橋山号紅楓山是候先君之遺愛也
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
いふらふらふらふらふらふらふらふらふら
わらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

西行法師

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
その婦の甲よりわらわらふらふらふらふら

あふ系橋の部一宗家とていふもさういふ所の後
秋の信より一り方ありてさういふ所
移りし人々をわらわらと見せしむるなり
~~~~~

或曰、面和久字本俗字、於義理亦不通、曉焉、郷老  
曾言、是実、吹面橋也、往昔橋畔有紅楓林、村落秋  
晚、人行稍稀、唯所紅過者、農夫野人、西風飄々吹  
衣紅葉紛々飛面、蓋風吹來、則物已分、者紛也  
仍呼之曰吹面橋、

野田、玉川、

在塩竈村以南、往昔有河流、潮汐亦未往、石瀬、処  
浮光躍金、深潭、地清影沈、壁皆為月、得嘉名、如今  
為瘠地、而唯遺野田、之清潭、耳、或曰南部領九戸  
郡亦有同名者、

みちのくはけりけりけりけりけり

能因法師

新羅の  
又、  
あふ系橋の部一宗家とていふもさういふ所の後  
秋の信より一り方ありてさういふ所  
移りし人々をわらわらと見せしむるなり

順徳院御製

後  
みちのくはけりけりけりけりけり



邦有親も家也十首 三月

鴨 秋 曼

建後撰 此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

所集

光る川田の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

後多和院

考案

此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

本神官百首所歌

按古人玉川之於菽花詠諸、進江玉川者、往々

有之今用之、奥州玉川者尤可怪此下有或分

玉川或分野田或称入江或称地塘者、又録之

下以備参考

周防内侍

多岐の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

家 隆

家 集

此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

よみ人三つら

新和撰

此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

鴨 長 明

此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く

弘安百首

長 祚

此の川は水は清く其の味は甘く此の川は水は清く其の味は甘く



建長寺年表一考

為家

こしやせいのいぬとくくくくけそみよふあ川の水

政村

つらふ家地田の入ほむをうとくくくくくくくくくくく

為家

せはくくふせ田のうけりはり少水とるうそのうれくく

るそ教野田陸奥

後多和院

まき水多野田のうけりはり少水とるうそのうれくく

長明

むしあふふいふふふふふふふふふふふふふふふふ

亀井泉

在加瀬村有寺号亀島山天正寺相傳伊沢將監  
家景瑩地也始称增長寺後改之其墓畔有古梅  
傍有幽泉曰之亀井泉

春日神社

在春日村相傳大職冠第七世從四位下陸奥按  
察使藏人頭藤原富士麻呂仁明帝兼和十年癸  
亥三月為陸奥國刺史居多賀城其生質達文武  
好和歌十一年甲子建春日神社于城北上野原  
亦後世祀之至押領使秀衡時新造營州人益崇

春日神社



之文治五年癸酉賴朝東征之次以伊沢左近將  
監家景而補奥州留守職居岩切邑高森塞乃多  
府俗間以多賀字呼也此時相繼崇敬焉至留主上  
為高森乃多賀祭也



野外政景重經營宮社天正十八年庚寅征此條  
政以政景遲參之罪沒收采地寬文元年辛丑  
十一月二十六日細村君寄附祭田延宝元年  
癸丑春初造神祠三月十三日遷之新祠祀之

奥羽觀跡聞老志卷之六終



